教育実習の学生にできる「単なる文法説明」の活かしどころ

――入門期の文法～読解指導――

京都教育大学附属高等学校国語科　　谷川　司

「文法知識を解釈に生かす」とは。

古典文法の知識は本文の正確な読み取りのために必要であるとは必ず言われることで、文法のための文法学習を生徒に強いることは誰しもが遠ざけることであろう。学習指導要領の文言を待つまでもなく、教育実習に来る学生たちの指導案に多く見られる常套句は、「単なる文法説明・文法学習にとどまらず…」である。ところが彼らの実習授業では、係り結びの指摘にとどまったり、助動詞の意味の確認に終わったりすることがほとんどで、そこには読解につなげる意図が見られない。つまり、正確に読み取り、解釈するという行為に学生が習熟していない。中には「単なる文法学習」を当人に対して行いたくなるような学生も少なくなく、「とどまらぬ」先などまさに「…」である。

幸いにして、古典文法の知識に大きな欠落がなく、本文を正確に読む力量を持つ実習生に恵まれたとき、「単なる文法学習にとどまらぬ」本文解釈を彼らが展開できるようなアドバイスにはどのようなものがあるだろうか。高校一年生の教材から『竹取物語（かぐや姫誕生）』（筑摩書房『精選国語総合・古典編』）を選び、助動詞「めり」・接続助詞「つつ」を解釈に生かすという例を提出してみたい。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけて養はす。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節を隔てて、よごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。

この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどとかくして髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつ

る人になりぬれば、髪上げなどとかくして髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちのきよらなること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

翁、竹を取ること、久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸斎部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど、三日、うち上げ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。世界の男、あてなるも、賤しきも、「いかで、このかぐや姫を得てしがな、見てしがな。」と、音に聞き、愛でて惑ふ。

この本文中から、「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」と言う翁の台詞を取り上げ、「知りぬ」とは何を知ったのか。また、「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする」ことが、どうして「子になりたまふべき人なめり」と考える根拠になるのかと言う問題を「文法的に」考え、それを読みの広がりに生かしたい。

「知りぬ」とは何を知ったのか。――助動詞「めり」――

「知りぬ」について、何を知ったのかを問えば、大学生であっても、「三寸ばかりなる人が竹の中にいらっしゃること」のような答えが返ってくることがある。高校一年生ならばなおさらだ。「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて」は「知りぬ」の理由に当たるのではないかと指摘すれば、「にて」は格助詞でここでは理由を表すなどという説明をするまでもなく、先の答えの誤りは容易に納得されて、「子になりたまふべき人なめり」の部分が「知りぬ」の内容であると答えてくる。ただその理由については、翁のこの発言（会話文）の中で、残りはこれしかないからという発想であることが多く、助動詞「めり」を根拠に挙げる学生はあまりいない。そこで、推定の助動詞「めり」を説明すれば、生徒はこの翁の発言の構造を理解し、先の問いに充分対応できるのではないかというアドバイスを与えたい。つまり、

「めり」の文法的意味は「推定（～ヨウダ）」であること。

「推定」という用語の意味（「推量」との違い）は、「根拠のある推量」であること。

特に「めり」は、「視覚的な根拠」による場合が基本であること。

（これらは「単なる文法説明」である。）

を示したうえで、

「子になりたまふべき人なめり」と推定する根拠は何か。

を問うような組み立てはどうですか、というわけである。

「翁自身が毎朝毎夕見る竹の中に、この人がいらっしゃる（「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中に

おはする」)」のを見たことを根拠に「私の子におなりになるはずの人であるようだ(「子になりたまふべき人なめり」)」と推定していることは容易にわかるはず。したがって「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする」「ことによって(「にて」)」知った(「知りぬ」)ことは、当然、「子になりたまふべき人なめり」ということであると理解されるだろう。

このような取り上げ方ならば、助動詞「めり」の「単なる文法説明」にも、「…にとどまらぬ」積極的な意味がある。

なぜ、我が子と考えるのか。——接続助詞「つつ」——

さて、この翁の発言の構造がわかったとして、次に来る問題は、「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする」ことが、どうして「子になりたまふべき人なめり」と考える根拠になるのかということである。「翁は竹をいつも見ていたから…、竹に親しみを感じていたから?」と自信なさげに答える生徒の顔が目に浮かぶ。ここで実習生には、「冒頭の第二文に伏線を張っておいたらどうか」とアドバイスしておきたいところだ。

野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。

この一文、一年生に口語訳を求めると、「野山に分け入って、竹を取って、多くのことに使っていた」のように、「つつ」を全く無視、あるいは回避する者が圧倒的に多い。ここで「つつ」の「単なる文法説明」が必要である。つまり、

接続助詞「つつ」は、反復(繰リ返シ〜シテハ、)・継続(〜シ続ケ、)を表すのが基本であること。

をはっきり示しておくべきなのだ。このことから、翁が竹を取るという行為は、ただ一度きりのことではなく、繰り返し何度も為されていたこと、言わば翁の「日常」であり、その行為の現場である竹の群生する野山は、翁のテリトリーであることを押さえるのは、無理のない展開であろう。

さらに、「よろづのことに使ひけり」に関して、具体的に何を作ったのかを問いかける指導案を示す学生がいれば、先ほどの「つつ」からの展開と併せて、「翁像」を作っておくことを薦めたい。つまり、この翁は「籠」やら「笊」やら「箱」やら様々なタケカンムリの物ものを作り出す職人である。そしてこのバンブーマスター(?)の生活の場は竹林であり、その生業を支えるものは竹に他ならない。竹は、翁の「日常生活(テリトリー)」の中にある。「われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする」ことが「子になりたまふべき人なめり」の根拠となる理由は、ここにあるのだ。

京都教育大学　機関リポジトリ　クエリの森



この文献は、国立情報学研究所において電子化されたものを、本学でテキスト加工したものです。